

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<https://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-C reate , TOHOKU!

2 0 2 5 年（ 令 和 7 年 ） 8 月 16 日 土 曜 日

無料

第159号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）8 月 16 日 土曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71 歳の新人
歴史映像作家兼プロデュー
サー。3 作目の「古代製鉄の
埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】
の大崎上映会は延期。とは
いえ新型コロナ禍を乗り越
えて 4 作目制作に向けて奮
闘中。趣味は古代史・縄文
文化研究。埋もれた歴史を
発掘することと東北から日
本を変えることを標榜。



東北米農業 第三弾 東北米産業に大革命は起こせるか？ 稲作伝来の2000年前から冷害・不作・増産・減反に苦しみ られてきた東北米産業大変革チャンス到来か 目先の価格高騰問題対策などでなく、少なくとも50年先を 見越し、世界最先端の米どころ東北を実現するための具体 像をイメージしてみようではないか？

米価格急騰で迷走する
政府方針に騙されるな

元とは言え、政府によ
る米の需要と供給に関する
予測を見誤ったせいで米価
格急騰問題が起きたのだ。
しかし、当初は素直にそ
の誤りを認めず、問題をす
り替え「救世主」気取りで、
極端に安くした備蓄米を放
出して価格を安定させよう
としたというのが今回の米
騒動の実態であった。

人為的な操作を加えずと
も、自然な米需給関係に任
せれば、極端なアンバラン
スでもなければ、異様に上
昇した米価は下がるのだ。
一部のメディアも「救世
主シナリオ」の盛り上げに
参画したので、こうした問
題のすり替えに気づかない
人も多かったかもしれない。

具体策欠落の減反政
策から増産への転換

最近、政府から減反政策
を転換して、増産に切り替
えるとの発表があった。し
かし、しっかりとした中味が

伴わない方針のようである。
米価格高騰の理由が、減
反による供給不足と決みつ
け、減反を止めれば価格が
下がるとの単純な理屈のよ
うだ。そして、拡大した耕
作放棄地を増産体制に組み
替え、米の輸出にも努力す
るということのようだ。

しかし、米農家ははじめ
米に関係する政治家から
は不人気の政策のようで、
はつきりと怒りを表明する
人も多数存在するようだ。

それは当然である。減反
政策に関連する周辺要素を
何も変えずに簡単に方針転
換が可能になるわけがない。
また、輸出するといつても、
安い米余りの外国に今は太
刀打ちできるわけもない。

米の消費がだらだらと減
少してきたからの減反政策
なのに、具体的な中身が欠
落したままの減反政策転換
で、突然に米の増産に切り
換えよといわれても、米農
家はどうしたらよいか困っ
てしまうことだろう。

田植えをしない稲作
への補助金も検討中

次には、これも唐突であ
るが、水のない田んぼにい
きなり種もみをまく米づく
りに補助金を出すという方
針も示された。

苗づくりや田植えの手間
が要らないためにコストダ
ウンが可能というが、大規
模農家には導入が容易でも
小規模農家にはむずかしい
側面があるようだ。

それに、総合的なコスト
ダウン政策の一環としての
明確な位置づけもないので
米づくりの何を変えようと
するのかが見えない方針で
ある。場当たり的な、人気
取り政策なのであるうか。

五十年先を見据えた東
北の米づくりを考える

このように政府からは場
当たりの政策が発表され
ているが、再び無責任な政
策に振り回され損失を被る
のは結局東北米農家である。
米と東北との関わりは他地
域とは比べようもないほど
深いし、稲作伝来以来二千
年にわたる恨みも悲しみも
ある東北米づくりである。

当新聞の一五七号、
一五八号と東北米産業問題
を二回連続で取り上げてき
たが、今般は、それらの総ま
とめとして、今後五十年先
までをも見越し、東北独自
の、新発想による東北米産
業の理想的な未来図を各視
点から描いてみたいと考え
る。

東北米産業の大改革イメージ その①

東北米産業従事者の若返り実現…高収入実現必須

東北米農業の最大課題
は若い後継者の増加

東北の米産業が今後五十
年先も生き残っているため
の最大の課題は、何といっ
ても、若い東北米産業の担
い手が増えるかどうかとい
うことにかかっている。

すでに、現在の東北米産
業の担い手は高齢化してお
り、いまのままでは変わら
ず推移すれば、そして、若い
東北米産業の担い手が増え
なければ、東北の米産業は
近い将来に消滅する。

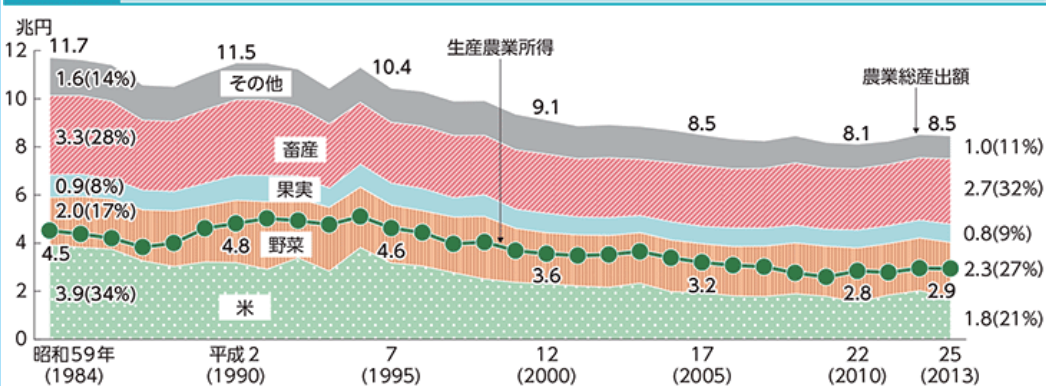
こんなあたりまえのこと

あまり注目されていない
ことこそが問題である。
つまり、高齢化は話題に
はなつたとしても、ただ嘆
くだけで、具体的な改善策
について活発な議論がない
状況が最悪なのである。

若い米産業後継者が
増えない理由 その
① 収入が少ない

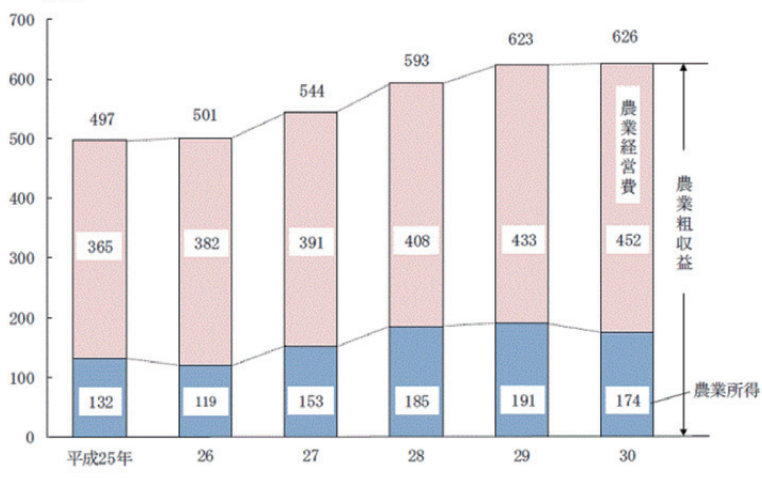
若い米産業後継者が増え
ない最大の理由は、何とい
つても、収入が少ないこと
である。
少し古い農林水産省のデ

図 2-1-1 農業総産出額及び生産農業所得の推移



資料：農林水産省「生産農業所得統計」
注：その他は、麦類、雑穀、豆類、いも類、花き、工芸農作物、その他作物、加工農作物

図 個別経営体の経営収支の推移（全国・1経営体当たり）



農業経営統計調査 平成 30 年個別経営の経営収支：農林水産省

ータであるが、それを見ると、米の国内生産所得はこの約三十年でたらたらと減少を続けていて、下落する一方である。

具体的には、昭和五十九（一九八四）年に比べて米、畜産、果実は減少しており、中でも米については二兆一千億円の減少となっている。

また、農業総産出額に占める割合でも、昭和五十九年では、米が最も高かった（三十四％）が、平成二十五（二〇一三）年では、米（二十一％）と急落している。次いで、一軒あたりの米農家の収入を見てみる。

ここで、「農業経営統計調査平成30年個別経営の経営収支・農林水産省」というデータと農業専門ファイナン

シャルプランナーの西田凌氏の分析を編集引用する。この表はあくまで、米に限らず、すべての分野の農家の収入であることに留意する必要がある。

それによれば、平成二十九年と三十年を比べると農業の粗収益は六百二十三万円から、六百二十六万円に増えているが、それ以上に農業経営費が増えているので、結果的には農家の農業所得の全体の平均は下がっている、わずかに百七十四万円になっていることにまず驚く。しかし、もっと驚くべき数値がある。

水田作経営↓粗収益：約二百六十五万円、経営費：約二百九万円、差引所得：約五十六万円！

収入が極度に低いだけではない。たらたらと下がる一方の産業であることも大問題である。

なぜそんな将来性も見えない分野で若い人が働こうと思うだろうか？

若い米産業後継者が増えない理由 その② 将来性が見えない

この課題解決のための大改善のためにも、やはり、従来型の米産業をがらりと入れ替えるほどの大改革が必須である。しかし、そうした議論さえ耳にする機会もないのが残念でならない。

水田稲作農家の収入はたったの五十六万円なのだ。これでは、若い東北米産業の担い手が増えるわけがない。職業選択のひとつとして取り上げてもらうだけでも、この収入の十倍から十五倍に大改善する必要がある。

東北米産業の大改革イメージ その②

【新米どころ東北】から『米消費の激増策』を発信

減反から増産は必須だが目標をどこに置く？

この項で最初に取り上げるのは、いきなり米消費問題ではなく、まずは、東北米農業が目指す米の生産増加目標を決めることである。前号（百五十八号）でも触れたが、国内の年間生産量は約七百八十二万トンで、年間消費量は約七百九十七万トンというデータがある。いきなり総生産量の約七百八十二万トンを二倍にするのは非現実的である。したがって、増産目標を下げ、東北米産業にとっても分かりやすい目標にする。

同じく、前号（百五十八号）でも触れたように、令和三年データから、地方別の米生産量をみると、東北がトップであり、実に三割弱の生産を担っており、東北全体で二百一十万トンという膨大な生産数量である。したがって、この二百一十万トンを倍増させ、消費量もこの数値に引き上げることを前提に話を進めよう。

減反による耕作放棄地復活ばかりが米増産の手法ではない

東北の米を倍増するといったとき、すぐに思いつくるのは、減反による耕作放棄地復活だろう。そうすると、その目標は非現実的だという声があちこちから殺到しそうである。しかし、減反による耕作

放棄地復活だけが増産の手法ではないと考える。もちろん耕作放棄地復活も推進するが、そればかりに頼るのは現実的ではない。第一に大変な労力とコストがかかるし、元に戻すための時間もかかる。その手法を切って捨てるわけではないが主軸にはしない。ではどうするか？

米を田んぼで作らない方法を考える

最初に、新たな東北の米生産倍増を検討する土台と発想を大きく変えることを提言する。

短期間で、東北で、二百一十万トンの米を増産するには、それに見合う方法を考え出さなくてはならない。

それは、水なし水田での米生産でもなく、田んぼの大型化でもなく、「工場での米づくり」を実現することである。

そして、これはすでに国内で実現しているのである。それを見習って、東北で大展開するのである。これについては後述する。

倍増する二百一十万トンをどこで消費するか？

もし二百一十万トンの米が増産できたら、当然ながら、その米は誰が消費するのかという質問が来るだろう。この点についても、安易な発想で、輸出を目指したりはしない。この米シリーズで何度も触れているが、世界には米余りで、低コストの米を日本に輸出したくとうずうずしている国が多数あるのだ。いまの日本の米づくりではコスト的に太刀打ちできない。ではどうするか？

小麦粉使用市場に大胆に参入する

当新聞でもこれまで何度も指摘してきたように、「白米ごはん」の伸びしろは小さいし、むしろ縮小している。そこに増産の米を投入しようとするのは最初からあやまりである。ではどこに消費市場はあるのか？

最初に思い浮かぶのは、国内だけでなく世界でも有名になった「昨年度で七千九百億円になったラーメン市場」である。ここに大胆に「米麺」で挑戦する。いまや、ラーメンの単価は一杯千円を超えるが、それでも販売は伸びている。挑戦し甲斐ある分野である。

次いで立食いソバ業界にも進出できるかもしれない。さらには「米粉」で、日本人が大好きな粉ものの食にも挑戦しよう。

お好み焼き、タコ焼き、その他の粉ものはさまざま存在し、膨大な市場がある。いままでどうしてここに「米素材」で挑戦して来なかったか不思議に思えるほどである。

米消費の爆増のための最初のターゲット市場は、成長を続けて7900 億円市場となったラーメン市場である！

「米粉」の爆増のための最初のターゲットは、日本人が大好きなお好み焼き、タコ焼きなどの粉もの市場である！



ベトナムのフォーはラーメンと似ている・・・デリッシュキッチンより



台湾お好み焼き・・・贅沢な旅行より

東北米産業の大改革イメージ その③

近い将来に「超ハイテク米づくり東北」に大変身する？

これまでの話はけっして夢物語ではない

これまでに述べてきたこと、すなわち、「東北米産業従事者の若返り実現」も、そのための高収入実現も、東北米産業の明るい未来も、【新米どころ東北】から『米消費の激増策』を発信するには不可欠な米大増産も、単なる絵空事にすぎないと思われる方もおられるかもしれない。

超ハイテク米産業がすでに存在する

しかし、それらの不可能と思われてきたことすべてが現実のものとなる可能性を秘めた事業がすでに国内にあるのだ。ここでは早速それを紹介しよう。

兵庫県穴栗市にある「株式会社あゆち」という企業の新事業がそれである。

この企業は米を室内で栽培・収穫する水耕栽培技術を開発した。米の新品種『みずのゆめ稲』を使った実証が成功したと発表済みだ。

野菜プラントのような形態で米もプラント生産するという画期的な手法である。室内環境での無農薬育成で、天候や虫害にも左右されないため、安定生産が見込めるとしている。

また、東北の稲作では敏感な話題である「冷害」も気にしなくていいし、急な大雨により田んぼをケアする

ことも不要である。

二毛作どころか「六毛作」まで可能！

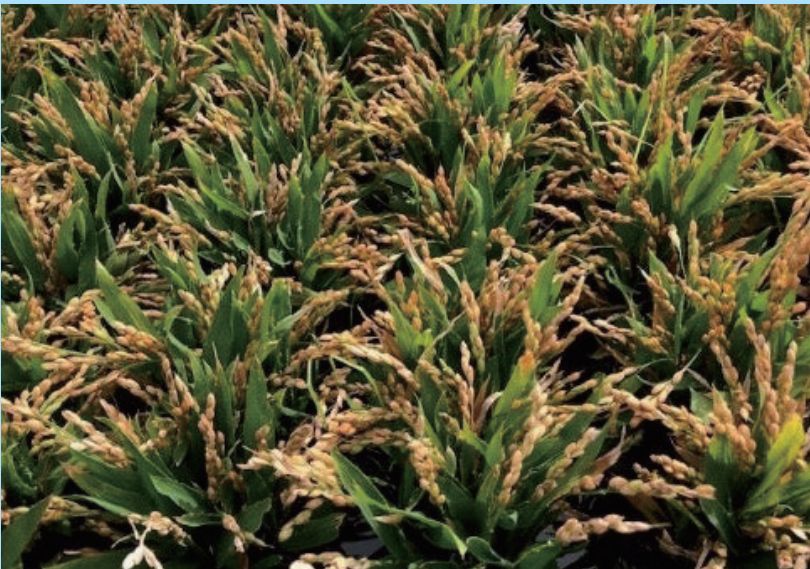
さらに驚くべきは「稲」の方で、この実験に採用された『みずのゆめ稲』がとにかく凄いらしい。

草丈15〜20cm、栽培期間が約2ヶ月の超矮性・早生品種だという。

一般的なコシヒカリだと栽培期間は種まきから収穫まで四〜五ヶ月かかるが、その半分の期間で収穫可能ということである。

これによって年六回の収穫も可能としている、夢のような品種である。

さらに稲丈が、前述のように15〜20cmまでに抑えられていて、これはコシヒカリ（80cm〜90cm程度）の五分



丈15-20cmの米の新品種SMARTAGRIより

の一以下で、風で倒される心配もなく、室内の狭小空間でも、野菜のような多段式の水耕栽培を実現できるというのだ。

さらには、将来的に、都市部や砂漠、寒冷地といった稲作が難しかった地域でも、米が作れて安定供給できるようになる可能性もある。

これは、単なる品種改良のレベルをはるかに凌駕した魔法の稲といえる。

とはいえ、現段階では、まだ実験に成功した段階に過ぎず、この米が出荷されるのは少し先の未来と考えられているようだ。

また、電源・空調による電源供給の問題もあるようで、そうした点の改良が必要のようだが、とにかく、東北の米産業にとっては夢の

ような明るい話である。

稲作伝来の2000年前から冷害・不作・増産・減反に苦しめられてきた東北米産業大変革のチャンス到来

何といっても、いまから二千年前に東北の地に稲作が伝来してから、数々の冷



米の水耕栽培と6毛作を可能にする品種改良・・・SMARTNEWSより

害・不作に苦しめられてきた東北にとっては、降って湧いたような、未来が明るくなるような話であることはたしかである。

ことなくなるのだ。一歩進め「世界のハイテク米どころ東北を目指せ！」筆者は、「東北米産業の二千年の恨みも悲しみもこの新技術で晴らせ！」と言いたいし、それだけでなく、さらに一歩進んで、「世界のハイテク米どころ東北」を目指せと言いたいのである。

東北米産業の大改革イメージ その④

東北米産業ベンチャーを林立させる

「株式会社あゆち」に續けて東北でも米づくりベンチャーを立上げよ

「株式会社あゆち」の事業は素晴らしいの一語に尽きるところだが、ひとつ残念だったことがある。

それは、こうした事業が米どころの東北から誕生しなかったことである。

しかし、いまからでも遅くはない。著作権その他の権利を侵害しない限りにおいて、たくさんのチャレンジがあつてよいのだ。

しかも、そうした新事業チャレンジが東北から誕生しないものだろうか？

いつまでも既存の東北米づくりにこだわら続けないで、ときには斬新な発想で米問題を乗り越えることを期待したいと思う。

金融界にはお金が有り余っていて有望なベンチャーを探している

いま、日本だけでなく、世界中で企業への投資資金が潤沢である。

AIとかの分野だけでなく、農業分野で、しかも米づくり分野にもそうした資金が投入されていくことを切望したいし、それはむしろいいことではない。

米の品種改良、米の水耕栽培装置の開発、その装置の省力化・節電方法の開発などベンチャーネタは山ほど存在する。いつか東北が米づくりベンチャーだらけになることを夢想したい。

東北はどのようにして東北と呼ばれるようになったのか

現在「東北」が指すエリアは

現在、東北あるいは東北地方と呼ばれる地域は、本州東北部に位置する青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県の六県を合わせたエリアの呼称として使われることが多い。四七都道府県を七つの地方に分ける七地方区分でも、八地方区分でも、東北地方はこれら六県の地域を指す。

一方、東北六県に新潟県を加えた範囲を対象とする法律もあり、その場合は東北は七県となる。全国総合開発計画や国土形成計画もこれら七県を一つの対象地域としているが、六県を対象とする場合と紛らわしいので、この場合は「東北圏」と称されるようになった。

ただし、新潟県内に住む人の意識としては、東北に属するとい意識は希薄のよう

で、新潟放送が昨年行ったアンケートでは、最も多

かったのが「関東甲信越」で五五パーセント、続いて「北陸」の二五パーセント、「中部」が一七パーセントで、「東北」はわずか三パーセントだったそうである。

ところで、この地域が東北と呼ばれるようになったのはいつからのことなのだろうか。その歴史は意外に新しく、明治時代になつてからであるようである。それ以前は、今の東北六県のエリアは、奥羽と呼ばれることが多かった。つまり、青森県、岩手県、宮城県、福島県を含む陸奥国の「奥」と、秋田県、山形県を含む出羽国の「羽」を合わせた、両国を表す呼称である。

現在では、これら六県をまとめて表す言葉としての「東北」は完全に定着しており、むしろ「奥羽」という言葉の方はわずかに奥羽山脈や奥羽本線などに残る程度で、日常的にもあまり用いられなくなっているのとは極めて対照的である。

現在の東北地方のうち、青森県、岩手県、宮城県、福島県のエリアが陸奥国、秋田県、山形県のエリアが出羽国、と先ほど書いたが、初めから現在の東北全域がそれらの国に含まれていたわけではない。それらは、元々蝦夷が住んでいた地域を朝廷が征服していくことによつて、徐々にその領域が拡大していった。

東北のそれぞれの地域がいつくらいに朝廷の勢力下に置かれたかは、朝廷の「前線基地」がいつどこに建て

られたかによって知ることができる。現在の山形県庄内地方に城柵が築かれたのは七〇八年、現在の多賀城市に多賀城が築かれたのが七二四年である。当時の出羽国と陸奥国の最前線がこれらの地域だったわけである。

その後、七三三年に現在の秋田市に秋田城が築かれ、坂上田村麻呂が阿弭流為との戦いに勝利した翌年の八〇三年には現在の盛岡市に志和城が築かれ、出羽国と陸奥国のエリアが北上していることが分かるが、そこから先はまだ朝廷の勢力下には置かれておらず、どこまでが出羽国や陸奥国だったのかについては、必ずしも明確ではなく曖昧だったわけである。また、この頃は、陸奥国と出羽国はあくまで全く別の国という位置づけであった。

現在の東北地方のエリアが確定し、また陸奥国と出羽国が事実上一体の存在となったのは、前九年の役、後三年の役を経て、奥州藤原氏の時代になつてからのことと考えられる。既に前九年の役で陸奥国に勢威を振るつた安倍氏の頃には、現在の岩手県北部から青森県の下半島に亘る地域を治める安倍氏の一族の存在が確認できることから、既に安倍氏の勢力が本州北端にまで及んでいたことが窺える。また、前九年の役で戦功を挙げた出羽の清原武則は、在地豪族としては異例

の鎮守府將軍に拔擢されたが、元々出羽国を本拠にしながら鎮守府という陸奥国を治める役職に就いたわけで、陸奥国と出羽国が一体的に治められる萌芽がここにあったと言える。

これら安倍氏と清原氏の遺産を受け継いだのが奥州藤原氏初代の清衡だったわけであるが、まずこの連載でも何度か紹介している「中尊寺供養願文」には、「弟子（清衡のこと）は、いやしくも祖考の余業を資し、あやまりて俘囚の上頭に居す。出羽陸奥の土俗は、風草に従うが如し」というくだりがある。出羽と陸奥の土着民はどちらも草が風になびくように清衡に従つてい、と言っているわけである。また、「吾妻鏡」に引用されている「寺塔已下注文」には、「まず白河関より外浜（そとがはま）に至るまで、二十余ヶ日の行程なり。その路、町ごとに、等率都婆を立て。その面に金色の阿弥陀像を図絵し、当国の中心を計りて山の頂上に一基の塔を立つ」とある。南は現在の福島県白河市の白河の関から北は青森市の外ヶ浜まで。これが清衡の治める地域の南限と北限であったわけである。

四代泰衡は「出羽陸奥押領使」であつたと「吾妻鏡」に記載されている。押領使というのは、武力を以て地方の治安の維持や反乱の鎮圧に当たつた官職で、出羽陸奥両国の押領使を担っていた

ということは少なくとも、この時代の出羽陸奥両国は軍事的には奥州藤原氏の下で一体的に支配されていたことが分かる。

さらに言えば、軍事的だけでなく、行政的にもそうであつたことが分かるのは、「吾妻鏡」に、文治五年奥州合戦の後、頼朝が朝廷に対して、泰衡が有していた「奥州羽州の地下管領」の権限を自分に委譲されるように要求している記載がある。また、別の箇所には、陸奥出羽両国を知行するように朝廷から権限をいただいたが、それは泰衡が管領した跡だったからである、という記述もある。これらの記録から、頼朝の、ひいては鎌倉幕府の陸奥出羽両国への権限の行使は、奥州藤原氏の跡を継いだものであることが分かる。

これ以降、陸奥国と出羽国は一体的に扱われることが多くなる。南北朝時代、陸奥国府の鎮守大將軍、北畠顯家は陸奥国だけでなく出羽国にも権限を行使している。足利氏が置いた奥州総大將も奥州管領も、やはり陸奥国だけでなく出羽国も統治した。豊臣秀吉の「奥州仕置」も陸奥出羽両国に及んでいる。こうした実情を反映して、陸奥出羽両国を「奥羽」と称することが多くなつていったのだろう。

自由と変革の象徴として使われた「東北」

「東北」という言葉は、江

戸時代にもいくつかの紀行文のタイトルとして現れているが、ここでの東北は、現在の東北六県だけでなく、より広い範囲を含み、ものによつて北陸、関東、あるいは北海道なども含まれている。

現在の領域に近い意味合いで「東北」が記された最初は、明治初期だつとされる。

現在の東北六県のエリアを指すようになった最初は、自由民権運動の頃だつたとされる。戊辰戦争で敗北した奥羽越列藩同盟の諸藩は賊軍とされ、政治の中枢にも参画できず、新政府の派遣した県知事によつて支配される状態が続いていた。自由民権運動は、薩長出身者による藩閥政治を批判し、民選議院の設置を求めるものだったが、今の東北各地においても自由民権運動が巻き起こつた。この地において自由民権運動を主導した人たちは、新政府のある西南に対して、自らの地を「東北」と位置づけ、東北における自由の獲得や東北から日本を変えていくことなどを主張した。

その人たちが結成した「東北七州自由党」の「東北七州」とは、明治新政府によつて分割された陸奥出羽両国である、陸奥、陸中、陸前、磐城、岩代、羽後、羽前の七つを指しており、間違いない現在の東北六県に重なる。これ以降、東北改進黨、東北議政会、東北自由新聞など、現在の東北六県をそのエリアとする自由民権運動に関

連する動きが生まれてきているのである。

すなわち、「東北」とは希望の名称だったのである。戊辰戦争での敗北、その後の「戦後処理」でもこの地の政治は、ここに生きる人々の意向ではなく、中央の意向によつて行われ、それを覆すこともままならなかつた。そうした状況から立ち上がり、現状を打破するための自分たちの拠りどころとして「東北」を打ち出したのである。これは奥羽越列藩同盟に代わる、この地に生きる人々にとつての新たなアイデンティティだつたに違いない。

中央が「東夷北狄」の略称としてこの地を含めた地域を東北と呼んだとしても、その全く同じ言葉をこの地の人々はそれとは全く違う意味合いで用いた。そして、それは自由と変革の旗印であつた。

つくづく東北の人々がそういう切り返しに長けていると感じるのは、つい最近も似たようなことがあつたらである。以前、この連載でも紹介したが、「東北でよかった事件」である。復興相が口にした「震災が起きたのが東北でよかった」の言を、鮮やかに「自分たちが生まれ住んでいるのが」東北でよかった」に上書きした東北の人々には、自由と変革の象徴として「東北」の言葉を使い始めたかつての人たちのDNAが、間違いない受け継がれているように思うのである。

執筆者紹介

大友浩平

（おおもともこうへい）

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

「蝦夷」は日本分断の象徴か？ 日高見国、非・古代ロマン宣言の事

昨年末に建物の取り壊しの為閉店した、友人が経営する仙台・国分町の老舗バーに私は最終日近くに訪れた。その頃自身が個人出版したばかりの小説本をその友人に見せたりもしていたのだが、後から入店してきた一人の初対面の年配客が本の表紙に印刷された私の筆名を見て言うのだった

「奥羽越、ですか・良くない名前ですね。」

何でも今時そんな昔の争いの種になった（且つその結果敗者の汚名を被った）考え方を名前にするのはどうかと言うのでいかにも不愉快な様子なのであった。

無論、そのような感情を抱くには相応の歴史知識を有しての上であらうし、今



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

もそのように考える人がいるのだな・と一つの貴重な感想として承った（且つ

気弱な性分故、論争は慎重に回避させて頂いた）のだが、昨今は東北の独立だとか地方の自治などと語れば

「日本の分断を狙う輩」、つまり左翼だとかリベラルなどとレッテルを張られ兼ねない雰囲気がないだろう

かーそんな風に感じるのも先月の参議院選挙があったからかも知れない。本稿では、今回の選挙でクロースアップされた「日本人ファースト」始めとする国民誰しも意識せざるを得ない政治的テーマを前に、体制によつて揺さぶられ、また意図的に改変されようとして

いるかも知れない、民族アイデンティティについて考えてみたいと思う。

※

つい最近の拙稿にて、選挙に行つても何も変わらない、一種強引で大胆な運動即ち革命しかないーというような論考を紹介したばかりだが、実際の今回の結果を見ると、決してそんな事はないのではないか・という感慨を持つに至った。

七月の後半に迫る投票日に向けて熱を帯びた街頭演説の中でも新興政党の一つである参政党はひと際多くのキレと勢いのある演説者を抱える印象で、党代表も含め「日本人ファースト」（ま

ず国民を第一に考える）を前面に押し出したその演説は情熱的であり聴き応えのあるものであった。

彼らはマスコミや他政党それらと繋がると見られる人々からの批判や妨害行為

ネガティブキャンペーンに晒されながらも、それらを笑つて跳ねのける経験と度量、

話術と戦略を備え、結果自他の予想を上回る議席数を獲得、国会での発言力にも

大きく影響してくる事で決して小さからぬ躍進を果たしたと言えるだろう。

おそらく国民の多くの心にある最重要項目は、かつてない多くの社会問題を抱えた日本において現状の政府・社会を革新しより良い

国民の生活を実現する事であり、その人々に寄り沿う主張と困難を越えていく勢いを併せ持つ新興政党はこの時代のヒーロー的存在に見えたに違いない。

今回の選挙では、政治に無関心であった若者層までも主にSNSを通じて巻き込んだ事が注目されたが、

右派・左派などの対立構造の難解さは彼らを少なからず戸惑わせたようだーあらためてこどもも整理すると

左派・左翼即ち共産・社会主義陣営はよく同一視されるリベラル（自由主義）とは本来別のものだが、個人

の自由・権利を尊重し国家や社会の干渉を最小限に抑えるという考え方は共通する。だが近年は外国人特に隣国中国や朝鮮の在日層

中東からの新規移民に関する過度の権利付与・尊重傾向が本来の国民の生活状況と均衡が取れていないと批判され同傾向の現政権とともに国民の大きな支持を得られぬ状況が続いている。

一方、右派・右翼は国家主義・民族主義に通じ、保守という概念とこれも必ずしも同一ではないが、伝統・権威を重視する点では矛盾しない。戦後はまさに平

成の近年まで先の戦禍を招いた帝国主義の残影として忌避されるイメージの強いものであったが、近年では

国民が国家に守られていないという実感が強まり、かつての「日本人の為の、強い国・日本」を望む声が高まつていると言える。

ところで自身は右派か？左派か？という問いかけを随分前に拙稿で行った事がある（一〇九号）。その際

私は東北第一と考える立場からは特殊な右派、故に日本全体から見れば左派と言

えなくもない、などと結んだと思うが、あらためて可能な限りフラットな、客観的視点で考えてみたい。

参政党は「天皇の下に統合された日本国民」を理想に掲げる明らかな右派政党であり、多くの人が「当然の事だ」と賛同の声を上げて

いる事がネット上でもわかる。実のところ私自身後述する日高見国の関連から

も古代蝦夷と天皇が単純な敵対関係ではなかった可能性を見ており、またあま

りにも長い年月に渡り日本国の一角である東北が今更

天皇否定する事は現実的ではないと考えている。

しかし、北方のアイヌ民族、南方の琉球民族はどうだろうかー東北ほどすんなり

と一点の曇りもなく「天皇中心」を受け入れられるだろうか？そこが、どうしても引つかかるところだー

天皇以外に、日本列島の各民族が協力し合う構図は実現できないのか・そう考

えてしまうのが、左派たる所以なのだろうが、最大の

問題は参政党を始めとする保守政党が揃つて「アイヌは北海道の先住民族ではない」と主張しており、この

事でもリベラルと完全に対立する状況になっている事だ。一体なぜ保守政党や思想家は先住民族を否定する

のか？各政党や関連人物の主張などを検証するうちに興味深いー且つ等閑すべからざる論理の一種強引な転

換が為されている事に気づかされたのである。

参政党の躍進に警鐘を鳴らすフリーペーパー『縄文ZINE』によれば、一見

奇妙な傾向として、保守的新興政党の間で「縄文ナシヨナリズム」とも言うべき

の事だ」と賛同の声を上げて

いる事がネット上でもわかる。実のところ私自身後述する日高見国の関連から

換え操作が為された過去について綴つたのだが（七十

七号）、近年はおしなべて「日本スゴイ」的な右派の所謂ポジショントークに利

用されているとの事で、何でも西尾幹二著『国民の歴史』における国民統合の中

心としての天皇の影というもの

が実際に薄く、代わつて縄文の存在がその地位に据えられてきた経緯があるーというのだ。

参政党支持者である歴史学者・茂木誠氏は日本列島の西に大和国があった一方

で東にもう一つの勢力・日高見国があった可能性を認め、東北地方の東北という

名称が、西国からの一方的な視点に基づくもので不当で失礼な話だ、とも語っている。また古代に列島各方面から多彩な人々が流入した事から「日本は元々多民族国家だ」として単一民族

思想を批判してもいる。ところが、アイヌ関連の話題になると一転、

「北海道には先に縄文人が住み、鎌倉時代にアイヌが樺太から入ってきた。よつ

て北海道の先住民族は縄文人」日本人の祖先であり、

アイヌではない」という主張になる。西欧人がアメリカ先住民にしてきた事と北海道開拓は全く異なる

と説き、「日本人はアイヌを人間扱いしてきた」と部省だか日教組だかの思惑で縄文時代が無かつた事に

されたり、黒歴史にされたりと都合よく教科書の書き

にも程がある」と不快感すら表すのである。

氏の言う事が本当であれば、何故日本人は北海道を江戸期まで蝦夷地と呼び、

全て領土としなかつたか？知里幸恵、遼星北斗、そして萱野茂らアイヌたちの被差別の証言、苦悩の吐露と

民族の誇りの宣言は何だったか？あまりにも基礎的な事を、学者を称する者が蔑ろにしている事の違和感。

何故、氏が東北人を尊重する発言をしながら、一方で徹底的にアイヌを貶め、

傷つけるような主張を行うのか・それは恐らくは簡単な理由で、東北人は完全に国家に従属し「同化」しているが、アイヌは未だに

独自の民族を自覚・主張しているからに他ならない。

よくアイヌ否定論の背景として朝鮮関連組織乃至それらと関係する左派政党とアイヌ団体を通じ、共謀して不当な利権（右派は純粋なアイヌはもはや存在しない

と、民族である事すら認めようとしない）を貪つて

いるという彼らの見解が語られるが、注意したいのは氏は自らの帰属集団である

「日本人」を決して「大和民族」とは呼ばない事だ。

日本は多民族国家だ、とするのもそれは古代の事で

現在の日本人は何民族なのかには言及しない。北海道に先に住んでいたのは縄文人であると言うが大和民族

であるとは言わないー当然ながらその時代は民族概念

にも程がある」と不快感すら表すのである。

氏の言う事が本当であれば、何故日本人は北海道を江戸期まで蝦夷地と呼び、

全て領土としなかつたか？知里幸恵、遼星北斗、そして萱野茂らアイヌたちの被差別の証言、苦悩の吐露と

民族の誇りの宣言は何だったか？あまりにも基礎的な事を、学者を称する者が蔑ろにしている事の違和感。

何故、氏が東北人を尊重する発言をしながら、一方で徹底的にアイヌを貶め、

傷つけるような主張を行うのか・それは恐らくは簡単な理由で、東北人は完全に国家に従属し「同化」しているが、アイヌは未だに

独自の民族を自覚・主張しているからに他ならない。

よくアイヌ否定論の背景として朝鮮関連組織乃至それらと関係する左派政党とアイヌ団体を通じ、共謀して不当な利権（右派は純粋なアイヌはもはや存在しない

と、民族である事すら認めようとしない）を貪つて

いるという彼らの見解が語られるが、注意したいのは氏は自らの帰属集団である

「日本人」を決して「大和民族」とは呼ばない事だ。

日本は多民族国家だ、とするのもそれは古代の事で

現在の日本人は何民族なのかには言及しない。北海道に先に住んでいたのは縄文人であると言うが大和民族

であるとは言わないー当然ながらその時代は民族概念



『縄文ZINE』アイヌ特集 2016年

する。

※

「日本人を第一に考える」事と、アイヌを先住民族と認める、という事がなぜ矛盾するのか？そのおかしさにまず気づく事なくしては

本当の日本の復活などあり得ない。何故なら、自らの愚かさを自覚できないのだから。アイヌが何故、朝鮮

の人々と繋がっているかーその始まりは差別に苦しむ同士が助け合った過去にあり、誰が彼らを追いつめた

かを、国民は学び直し自らを顧みなければならぬ。

東北人もまた縄文として日高見国を、過ぎた時代の無害な古代ロマンとして国

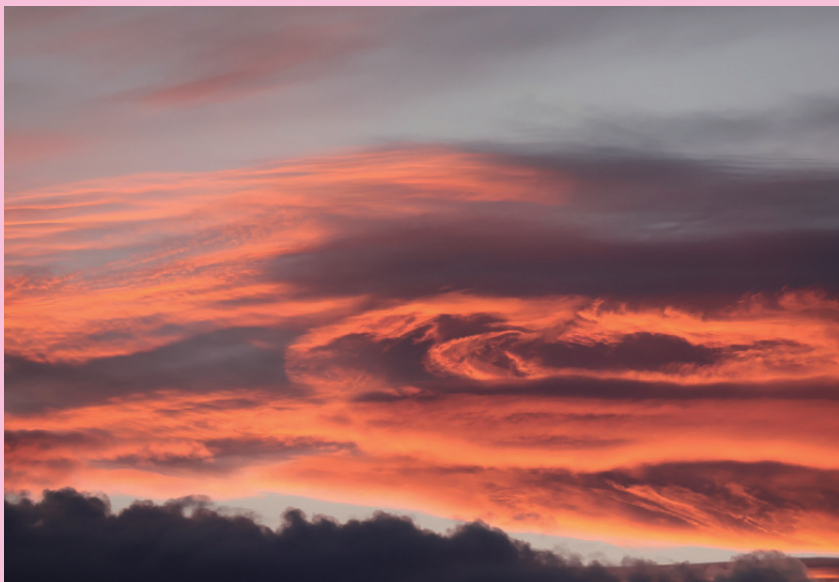
家に利用される事、それを否定する覚悟が必要になる

時を迎えるかも知れない。同化しなければ、一地方人にならなければ協力運営

できぬ国家など要らない。私達国民は、アイヌ民族のまま、琉球民族のまま、

そして日高見の地の蝦夷のまままで確かに一つになれる日本を渴望する。大和民族を自覚するならば堂々と名乗り「多民族」をまとめる

気概を持てば良いだけだ。



夕焼け



半世紀前の写真



藤沢の滝



エキストラ

シリーズ 遠野の自然
「遠野の立秋」
遠野 1000 景より

九州や北陸で線状降水帯による豪雨被害が甚大だ。これは、「梅雨の末期」のような気圧配置で日本近辺に大量の水蒸気が供給されたことに加え、海面水温が高いのが原因というが、例年にはなかったことであ

る。例年にないといえ、今年の梅雨はあつという間に終わりを不思議に思っていた。一旦明けた梅雨が時間差で再び発生したと理解すればよいのか？さらには日本列島を取り巻く自然環境に

大きな変化が訪れているのか？人間など太刀打ち不能の絶対不動の自然の循環が乱れるのはとても恐ろしい。そうしたときには、相も変らぬ遠野の自然の循環にすがりたい気分になる。



キンロバイ



フシグロセンノウ



オカトラノオ



セイヨウノコギリソウ

シリーズ【東北を再発見する旅】…㊫「立石神社」 なかなか見つけられず3時間もさ迷った末にたどり着いた「巨岩」

前日降った雪道のなかを三時間もさ迷う

岩手県の一関市藤沢町にある立石神社参拝も、五年前の年明け早々に思い立って敢行した岩手の巨石巡り取材のひとつだった。

東北新幹線で一関まで行き、レンタカーに乗り換え、前日に降った雪が残る市内を見ながら神社を目指した。初めての場所だったが、カーナビで神社参道入口まですんなりと到着し、順調なすべり出しかと思った。

ところが、なかなか神社が見つからない。ついには、車を降りて、あちこちさ迷い歩くが見つからない。不思議に思いつつも、やっと一人が通れる細道に行き着き、前日に降った雪が積もった枝をかき分けながら進むがそれらしき建物はない。次には、その道を引き返し、



見事な“ご神体”の巨石

小高い山の上にあるかと雪で滑りやすくなった坂道を登ってみるが見つからない。

そんなことを繰り返して、うちに約二時間が経ってしまっただけ。その日に回る予定の巨石神社がたくさんあるのに、これ以上時間を割くわけにはいかない。残念ながら、初っ端でつまづいたと思った。

ついにあきらめて帰ろうと、ゆつくりと車を走らせたら、「行き」では見つからなかった小さなコンクリートの目印を発見した。前日降った雪に半分埋もれ、しかも倒れていたのが発見できなかったのだ。一連の出来事は森の精霊によるいたずらかと思ったほどだった。

拝殿の裏に巨石群発見

神社発見で喜び勇んで、鳥居をくぐり、拝殿を左に

抜けたら広い空き地があったが、巨石は見えなかった。必ず巨石はあるはずだと探し回ったところ、拝殿の裏側に巨石の一部が見えた。それはありきたりの巨石であり、どこか物足りない。

拝殿の左側から右側に移って真正面から巨石を見ようとしたが、細い道しかない。そこを通り抜け、少し下った場所に行くと、そこは巨石だらけの場所だった。

強烈な存在感ある巨大な「陽石」が出現

まずは、最上段の写真を見て欲しい。

それは単なる巨石ではない。三段に分かれたというか、偶然にも積み上がったというか、黒々とした三つの巨石が見事なバランスで重なっている。しかも、斜め方向に重なって、空に向かって力強く突き出している。



立石神社参道入口・・・すぐ見つかると思ったのだが・・・



立石神社一鳥居と拝殿

るようにも見える。まことに存在感ある巨石であった。これは「陽石」、すなわち男性の陰茎の形をした巨石であり、古来より崇拜の対象とされてきた巨石に間違いなく直感的に確信した。

何という幸運だろうか

男石と女石信仰があった地域？

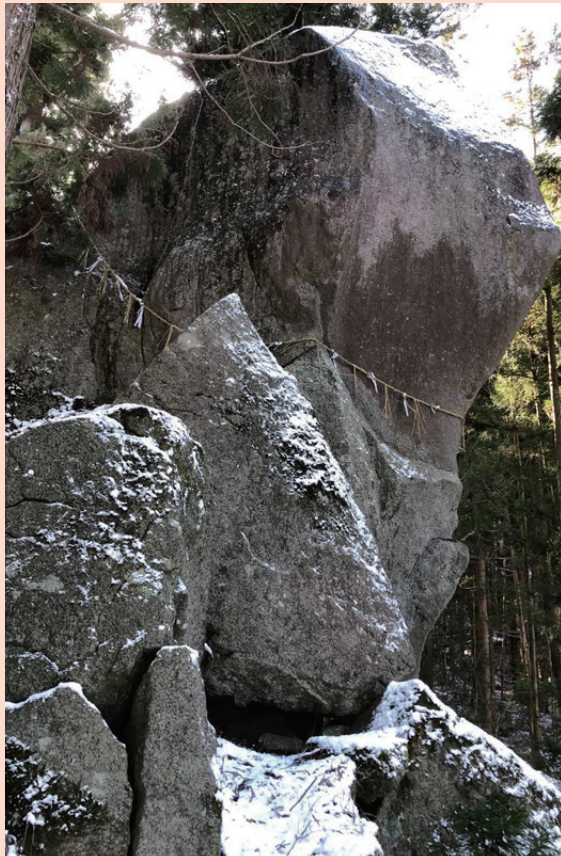
そういえば、前号で取り上げた「磐神社」には男石と女石信仰が伝わっていて、「磐神社」は近くにある松山寺境内の女石神社と合わせて、陰陽の二神を祀るとの伝説もあると記載した。「磐神社」は奥州市にあり、立石神社は隣の一関市にあって、近隣である。とすれば、古来、立石神社周辺にも男石女石信仰があり、この三段重ねの巨石は「男石」と位置づけても外的外れではないだろう。筆者は、以前から、この男石女石信仰は、「豊作の願い」「産出の願い」が込められたものと考えている。



さすがにここに至っては道に迷ったことに気づいた



小さな石の案内柱を見逃してさ迷ったのだ



拝殿の裏は巨岩だらけだった



写真でお伝えする
「あおもりねぶた 2024」

東北の風景

写真撮影 尾崎匠

